

バルタザール・シューマンによる 『2つの森林説教』(1607年) —近世ドイツにおける環境神学の先駆—

栗原 健

1 はじめに

教皇フランシスコが2015年に公にした『回勅ラウダート・シ』に見られるように、神と人間、自然の関係を論じる環境神学(ecotheology)は、今や欧米のキリスト教界において大きな影響を持ちつつある。地球温暖化や水不足などが急速に進行しつつあるにもかかわらず、人類が無軌道な開発路線から離れることができず、第3世界の人々を虐げながら自らの将来を破壊し続けるとすれば、これは重大な倫理危機であり、人間性の本質を問わざるを得ない問題である。人類を含めて地球上のいかなる生物も生態系から離れて生きることは不可能であり、相互に依存し合って生きている¹。この事実を再認識し、環境破壊の被害者のために正義を求めつつ、自然と共存する社会の形成を目指す環境神学の役割は、今後一層拡大して行くはずである。

環境神学が提唱され、注目を集めるようになったのはいつであろうか。先駆的な著作が現れた時期で言えば、1960年代から70年代前半にかけて、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』などを通じて環境破壊への懸念が世界的に広がり始めた頃と見ることができる。「現代のエコロジカルな危機は、人間を自然界の支配者として位置づけたキリスト教の天地創造論に起因する」

と主張したリン・ホワイト・ジュニアによる厳しい批判（1967年）が起爆剤の1つとなったことも疑えない²。ホワイトの問題提起を取り上げたジョン・B・カブ・ジュニアの『今からではもう遅すぎるか？—環境問題とキリスト教』が登場するのは1972年であり、このカブの著作や、チャールズ・バーチによるナイロビでの世界協議会大会における演説（1975年）などを皮切りに、以後キリスト教の視点から自然観の転換を訴える著作が次々に登場して来るのである³。

だが、環境神学を単に近年の危機に呼応してにわか形成されたものと見るのは、皮相的な見方であろう。人間と自然界の間にある相互関係とその宗教的な意味を洞察したキリスト教の言説は、20世紀以前にも存在しているからである⁴。中世までさかのぼれば、被造物全てが兄弟として共に神を賛美することをイメージしたアッシジのフランシスコ（1181年頃-1226年）の「太陽の賛歌」などは、現代の環境神学に共通する要素を備えている（実際、フランシスコは1979年、教皇ヨハネ・パウロ2世により「エコロジストの守護聖者」に定められた⁵）。しかしながら、フランシスコは例外的な存在であり、近代以前のキリスト者の著作のうちに自然環境に対する神学的・倫理的意識を読み取ることは、研究としては依然として未開拓のテーマにとどまっているのが現状である。

本稿ではその1つの試みとして、近世ドイツ・ルター派の牧師バルタザール・シューマンが著した『2つのキリスト教的森林説教』（イエーナにて刊行、1607年）を取り上げ、この著作の中で提示されている自然観を分析した後、シューマンの主張の中に現代の環境神学と共鳴する部分があるか否かを考察する⁶。基本的にシューマンは、森林は神が人間の用に供するために創造したものとする人間中心主義的（anthropocentric）な自然観を抱いており、その意味では彼の説教はホワイトのキリスト教批判を想起させるものである。しかしながら、シューマンの議論には森に対する限りない愛情

と喜びがこめられており、これを神の贈物として素朴に感謝する気持ちにあふれている。贈物である以上、人間は、贈り主の心と意図を考慮して慎重に森を活用する義務を持つことになり、ここに環境神学と響き合う部分が見えて来るのである。さらに、シューマンの説教の中には、貧しい者を富裕層の搾取から守るよう求める「環境正義（environmental justice）」の先駆と見なし得る主張も盛り込まれており、注目に値する。これらの点を踏まえながら、彼の言葉の背後にあるエコロジ的な意味合いを読み解いて行きたい。

シューマンの生涯については、ザクセンのテューリンゲン・ヴァルト（テューリンゲンの森）北部に位置するエルンストローダの牧師であり、1611年に死去したこと以外はほぼ何も知られていない⁷。彼が説教を述べたであろう教会（1599年建立）は現在もエルンストローダに立っている。なお、シューマンの説教からの出典については文中で頁番号を示すこととする。

2 第1説教：森林の創造者としての神

2つの説教のためにシューマンが選んだ聖書箇所は、詩篇104篇16節-17節「主の木と、主がお植えになったレバノンの香柏とは豊かに潤され、鳥はその中に巣をつくり、こうのとりはもみの木をそのすまいとする」（口語訳）である⁸。第1の説教のテーマとしてシューマンは、創造主である神のみが森林を創り、これを管理していることを論じて行く。緑豊かな木々を、単に「牛が新しい門を見るごとく、肉的な、外なる目で眺める」だけでなく、「内なる目（innerlichen Augen）」と理性をもって観察する時、人は喜びに満たされ、神に対する賛美の念に心を燃やされるのである（C2r）。事実、鳥たちが神をたたえて歌うように、被造物全ては創造主である神を賛美しているのだとシューマンは語る。詩篇150篇に「息あるものはこぞって主を賛美せよ」（新共同訳）とある通りである（C3r）。フランシスコの「太陽の賛歌」を思い起こさせる鮮やかなイメージである。

この議論の後に強調されることは、神のみが森林の「創造者、最初の耕し手であり農夫、最初の庭師、そして全ての木々を植える者」であり、（創世記1章に見るごとく）ただ神の「力強い言葉」によって自然界が創造されたということである（D3r-D3v）。シューマンにとって、これほどまで多種多様な木々を神が創造したことは奇跡であり（D2v）、その樹木が人手を借りることなく森の中で繁茂していることは畏敬の念を起こさせることであった。彼の目には、森は神が手ずから働いている恵みの場所として映るのである（E3r）。とりわけシューマンを感激させたことは、神が後世に生まれる人間たちの用に供するために、（数十年も先立って）木々を森に植え、成長し続けるよう世話して来たとの思いであった。彼にとっては、これは「あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである」（新共同訳、マタイによる福音書6章32節）と述べたイエスの言葉の具現なのである（G1v）。

聖句の意味について順々に説明して行くのが説教の役目であるが、シューマンは、レバノン杉については寒冷なドイツではほとんど見られない（F2v）として、詩篇に登場する2つ目の樹木である樅に集中する。樅はテューリングゲンの森林では広く自生している樹木であり、季節を問わず緑豊かなこの針葉樹の美しさは、「樅の木は気高い木、冬も夏も緑でいる」と「昔から歌われている」通りであると彼は述べる（F3r）。これは無論、現在でもよく知られているクリスマスの歌「樅の木（O Tannenbaum）」のことを指す。

ここでシューマンは、自然界の中に寓意を読み込む中世以来の伝統に従い、樅が示す倫理的な教訓について論じて行く。曰く、樅の種は非常に小さいが、長年にわたって種子が成長して巨大な樹木へと成長する。これは神の全能を示す驚異である。被造物に見られるこのような成長は、見た目は小さい者であっても人は軽視してはならないことを示している。「物乞いを侮るな。彼らが（将来）どうなるかを誰が知ろう」という俗諺の通りである

(F3r-F4v)。さらに彼は、春に芽吹く樅の針葉が十字状に見えることを指摘し、これは教会の中にある磔刑像のごとく、見る者にキリストの受難を想起させるものとする。樅の木を見るごとに、信仰者は、キリストに従うために自らも十字架を負うべきこと思い起こされるのである (G2r-G3v)⁹。

この後シューマンは、テューリングゲン地方に与えられた多様な神の恵みを挙げ、鉱物を含めて種々の資源と共に森林が与えられたことを感謝し (G4v-H3v)、イザヤ書41章18-20節を引用する。「彼らはこれを見て、悟り、互いに気づかせ、目覚めさせる。主の御手がこれを成し遂げ、イスラエルの聖なる神がこれを創造されたことを」(新共同訳)。このように、目に見えない神について人は被造物を通じて学ぶことができるとシューマンは強調する。イエス自身、「空の鳥を見なさい」、「いちじくの木を見なさい」と述べて、神に一層感謝するためにこの世の物に目を向けるように勧めているではないか (H4r)。ここで、樹木を観察することを通じて神学を学んだというクルヴォーのベルナルの言葉が引用される (H4r)。神のことを学ぶには、聖書と共に「自然の書」も用いることができるとの主張 (H4v) を説いた後、シューマンは第1の説教を終えるのである。

3 第2説教：森林の効用について (1)

第2の説教は人間の生活における森林の効用がテーマとなっているが、この説教は構成のまとまりを欠き、トピックが連想ゲームのごとく次々に移り変わるため、その議論の行き先を追うのは容易ではない。近世ドイツの聖職者の著作には構成が混乱したものが時折見られるが、シューマンの場合は極端なほどである。しかしながら、そのようなテキストの中でも彼の森に対する情熱は光を放っている。

シューマンは第一の効用として、森林が住居の建材を提供してくれることを挙げ、神がこのように樹木を備えてくれるのでなければ、人はいかにして

町や村を築くことができようかと論じる (K2r-K3v)。ここで彼は、火災などで町が失われる危険について語り始め、テューリンゲン地方の町々で起きた大火の歴史をひとしきり述べた後、火災の神学的な意味を論じて行く (K3v-M3r)。この議論は、当時のドイツにおいてよく見られた「火災説教 (Brandpredigten)」と呼ばれる説教文学の形式を踏襲したものであるが、森の効用という本筋からは離れてしまっており、この後に続く彼の議論の混乱を予告するものとなっている¹⁰。

これに続いてシューマンは、森が船の建材や薪、日用品のための材料などを提供してくれること、農地や牧草地となること、鳥や動物に棲家を与えてくれること、病を癒す鉱泉や薬草を生み出してくれることなどを効用の例として挙げる。このような実際的な利益に加えて、森がその「愛らしさ (Lieblichkeit)」をもって人の心に「特別な楽しみ、喜び、満足感」を与えてくれること (Q3r)、美しい声で鳴く鳥がいること (T1v) も効用として数えられている。立派な屋敷に住み、何不自由の無い贅沢な暮らしをしている都市の富裕者ですら、しばしばこのような楽しみを求めて村まで散策に来て、農民の素朴な食事を楽しむのである (R2v-R3r)。人間は自然から切り離されては生きることにはできないという近代的な洞察まで、シューマンのこの議論は決して遠くはないであろう。

このように心を癒す森の中に、中世の人々が聖なる修道院を建てたことはもっともであるとシューマンは見る (T3r)。しかし彼は、キリスト教が到来するはるか以前にも、古代人がすでに森を礼拝の場としていたことに目を向ける。「我らの先祖である古ゲルマン人」は礼拝堂の建物を築くことなく、野天の下、樅の森の中で神を拜んだのである。このような異教的な礼拝がイスラエル民族によってもしばしば営まれたことは、ホセア書4章に記されている通りである (V2r-V3r)。

ホセア書の記述では神はこのような礼拝に対して怒りを発しているが、興

味深いことにシューマンは、こうした自然の要素を取り入れた礼拝について否定的な態度を取っていない。聖書の時代においても、森から木の枝を持参することによって信仰の喜びを表現する慣習があったことは、詩篇118篇27節には「枝を携えて祭りの行列を祭壇の角にまで進ませよ」（口語訳）からうかがえる（V3r）¹¹。伝道者パウロがフィリピの信徒への手紙（4章4節）で述べているごとく、信仰者はどのような形でも常に喜ぶべきなのだとしてシューマンは語る（V3v）。現に、イエスがエルサレムに入城する際に、「善い心の人々」は棕櫚の枝を主が通る道に敷いて歓迎したのではないか。それゆえに、人々は喜びを表すために、「夏の季節」（夏至の時であろう）や結婚式の日に扉や居間を森の木の枝で飾るのである（V4r）。

カトリック教会の慣習に残っていた異教的な名残りや戦うことが宗教改革期の聖職者たちの重要な務めであったことを考えると、「喜びの表現」を理由に伝統的な風習を認めたこのシューマンの姿勢は実に柔軟である。彼はさらに、ユダヤ人の父祖アブラハムもマムレの森に住んでいたこと（創世記14章13節）を指摘し、そもそも人類の始祖であるアダムとエバが当初は楽園に住んでいた以上は、人間が森林から特別な快さを感じるのは当然であるとまで説いて行く（V4r-X1v）。

4 第2説教：森林の効用について（2）

説教の後半では、森林が与える別種の効用として、森やそこに住む動植物が与える道徳的な教訓が語られる。例を挙げれば、木々は高くなるほど嵐の風や落雷などの被害をこうむって倒れやすい。人間もそのように権力を持つほど危険である（Y3v-Y4v）。森の鳥を見れば、外見は美しい鳥が醜い声を持つことがある。一方、ナイチンゲールは見た目こそ貧相であっても愛らしい声を持つ。一つのものが与えられなければ別のものが与えられる、これは神の知恵であるとシューマンは語る。それゆえに誰も他者を見栄えの無さゆ

えに侮ってはならない、各人は神から賜物をもっているからである（Z3r-Z4r）。伴侶と共に死ぬというコキジバトからは、誠実な愛の姿を習うことができよう（Z4v）。森が倫理の学校でもあることを示しながら、シューマンはオウィディウスやウェルギリウスなどの作品からの引用を加えて、自身の人文主義的教養を披露している。

森の狼は悪魔の象徴であるという点にたどり着くと、彼の思考は、神に従う義人を攻撃する悪魔へと移り、「地獄の狼」たちによるプロテスタント信徒迫害の歴史へと広がって行く（Aa2v-Aa4r）。宗教改革期の説教者によく見られる連想である。やがて話はライオンの猛々しさに飛び、訓育を怠れば子供も野獣のようになるとの戒めが展開され、狼に育てられたというヘッセンの子供に関する物語が引用される（Bb2v-Cc1v）。

しばしこのような議論が述べられた後、シューマンは本筋に戻り、森を通して示されたこのような神の恵みに対して、人間はどのように応えれば良いかを考える。神が人間のために手ずからこのテューリンゲンの森を創造した以上、人がなすべきことは、真摯な気持ちをもって神に対して感謝を捧げるべきである。忘恩は恐ろしい罪であり、危険な結果をもたらす。アウグスチヌスが語るごとく「忘恩は乾いた風のようなものである。神の恵みの泉を枯らしてしまう」からである（Cc3r-Cc3v）。それゆえにシューマンは、神への感謝を示すべく、森の木を用いて教会堂や学校を建てて神の言葉を人々に教えるべきであると結論づける（Cc4v）¹²。

興味深い議論が登場するのは、これに続く説教の最終部においてである。不信仰や貪欲の罪の害を述べた後、シューマンは、森の資源は貧者に対して公平に利用されるべきであると説く。例えば、薪を売る際には、周辺に住む貧しい人々が妻子を養うことができるよう安い値段で渡さなくてはならない。「森やその他のものを慈しみ深さと豊かさをもって正しく扱うべきである。そうすれば、神もまた豊かで慈しみ深く（森の恵みを）与え、贈って下

さる」。パウロも言うように、「豊かに蒔く人は、刈り入れも豊か」(新共同訳、コリントの信徒への手紙2第9章6節)なのである (Dd3r)。

ここで彼は古代の歴史をひもとき、支配者が自然の資源を貪欲に扱おうとしたために資源自体が枯れてしまったという故事を幾つか引用する。例えば、トラキアの塩鉱では誰もが自らの必要に応じて塩を持ち出すことが許されていた。しかしながら、リュシマコス王(紀元前360年頃-281年)がこの塩に対して税を課したところ、たちまち塩の産出は止まってしまう、塩税が撤廃されると再び塩が取れるようになったという (Dd4r)。シューマンによれば、北ドイツの製塩業の中心地であったリュエネブルクでもかつて同様のことが起きたといわれる(残念ながらその詳細は記されていない)。

このようなことは人々が日常においても体験していることであると彼は主張する。ドイツの地ではかつて貧しい者はごく安い値段で魚や鳥を食べることが許されており、その頃には鳥獣も数多くいたのであるが、人間が利己的になって貧民を顧みなくなったら魚や鳥も数少なくなってしまったというのである (Dd4r-Dd4v)。現実には、人口の増加によって捕獲量が増え、繁殖が追いつかないために野生の動物が減少したのであろうが、シューマンにはこれは人間の貪欲に対する神罰に見えたのである。

ただし、森林を寛大に利用すべきことであるということは、決して森を全ての人に開放することではない。人々が望むままに森から資源を収奪したり動物を殺してよいということの意味するのではないのだとシューマンは戒める (Ee1v)。森は神から与えられた貴重なものである以上、これは注意深く維持すべきであり、君主は森番(Forstmeister)を任命して領地の森が荒廃しないよう監督すべきである。ザクセンで課されている「Waldmiete(森の賃借料)」もその目的のために集められている (Ee1v-Ee2r)。こうした議論の後に説教は、神が引き続きこの「うるわしい大地」を祝福して豊かな実りで満たしてくれるよう、人々がこの恵みを認めて神に感謝することができる

よう希う祈りをもって閉じられる。

4 『森林説教』の独自性：同時代の著者たちとの比較

どのような点において、シューマンの『森林説教』には独自性が見られるのであろうか。この点を分析するにあたって参考となるのが、宗教改革期に出版された自然世界に関するドイツ語書籍を分析したカスリーン・クロウサー＝ヘイクの研究である。クロウサー＝ヘイクによれば、植物学など、当時のこの分野の著作には3つの共通するメッセージを読み取ることができる。第1は、「被造物の世界の美しさは、創造主である神の全能と力を思い起こさせるものである」ことであり、第2は、「自然界の物はしばしば、特定のキリスト教の教義や教えを示す象徴的・倫理的意味合いを付与されている」こと、そして第3は、「飼い慣らされない野生の世界の過酷さ・危険の描写は、しばしば、人間の罪性と死すべき身であることを強調するものである」ことである¹³。この3点が『森林説教』においてどのように扱われているかを分析することにより、シューマンの主張と他の著者たちの自然観との共通点、また相違点を考えることができる。

最初の2つのメッセージについては、これらは『森林説教』にも登場する自然観である。シューマンにとって森は神の愛と驚異的な全能を示すものであり、例えば、小さな種子の中にもこれを巨樹に成長させる力が備えられていることは、彼には神の奇跡のように思えたのであった。また、目に見える自然界の被造物を通じて目に見えない神のことを学ぶことができるというシューマンの主張は、同時代の人々に共有されていた。一例を見ると、ヘルムシュテット大学で医学を教えたヤコブ・ホルスト（1537年-1600年）も、「神は不可視であるが、いとも精巧に創られた自然界の被造物と大地を通して、神を認識し理解することができる」と述べている¹⁴。また、シューマンがいかに多くの倫理的・宗教的象徴性を森の動植物のうちに読み込んでいた

かは、すでに見た通りである。

しかしながら、自然の過酷さと人間の罪性を結びつける第3のメッセージについては、『森林説教』はほとんどあてはまらないと言って良いであろう。森林に対してシューマンが抱いているイメージは驚くほどポジティブである。火災に関する彼の神学議論を見れば、彼が自然の諸力（この場合は火や風）が人間に対する神の怒りを伝える媒介として用いられることを認めていたことは明らかであるが、森林そのものについては、彼は常に神の恵みに満ちた喜ばしい場所として描いている。この点において、彼と同時代の著者たちとの間にはトーンに違いがある。

例えばホルストは、「アダム の 墮 罪 の 後、全 て の 物 は 本 質 から 変 化 し て し ま い、本 来 は 我 ら の 益 の た め に 創 ら れ た は ず の 創 造 物 も、我 ら に 対 し て 敵 対 す る も の に な っ て し ま っ た」と述べており、フランクフルトの植物学者アダム・ロニツァー（1528年-1586年）も、地は人の墮罪ゆえに呪われたため、人間が懸命に働いても、作物が悪天候や害虫により破壊されるようになったと説いている¹⁵。墮罪をもって人間と自然との関係にも決定的な変化が生じたとする自然観は、無論ルターの『創世記講解』以来ルター派信仰の正統な見方であり、シューマンとてそれを教義的には受け入れてはいたであろう。しかしながら、現実に森の美しさを語る際には、彼はそうした公式神学にとらわれていないように見える。神の手によって導かれ、人間の労なしで繁茂している森林という（シューマンが強調する）イメージからは、墮罪の結果という重みはうかがえないからである。

なお、『森林説教』では、自然界に跋扈すると信じられていた超自然的な存在、すなわち魔女や野人、あるいは「山霊（Berggeist）」といった存在については全く言及されていない。あやかしたちの背後にいと信じられていた悪魔ですら、説教の中で大きく取り上げられるのは狼の象徴性に関する議論ぐらいである。シューマンから見れば、神が庭師として直接森を維持・監

督している以上は、このような邪悪な存在がその木々の間に隠れていることは考えられないのであろう。彼にとって、森は恐怖を呼び起こす「異界」ではなかったのである。この点、ドイツの山々に伝えられる民間伝承と彼の自然観との間には、大きな違いがある¹⁶。

こうした点を考えると、この『森林説教』は、神の全能を賛美し、そこに棲む動植物のうちに種々の寓意を読むという当時広く見られた自然観に共通する見方を保ちつつも、墮罪の結果に重きをおかず、その美しさと効用性を一途に喜ぶという明るさにその独自性があると言えることができるであろう。

5 環境神学との共鳴

それでは、このようなシューマンの姿勢の中には、現代の環境神学と共鳴する部分は見られるであろうか。一見したところでは、『森林説教』と環境神学の間には大きな溝があるように見える。シューマンの自然観は人間中心主義に基づいており、森は人間の効用のために創造されたものであるとの考えがその土台にある。これを一步進めれば、自然の価値は人間にとっての利用価値によってのみ測られるということになってしまう。こうした自然観は、サリー・マクフェイグの以下の言葉に要約されている現代の環境神学のスタンスとは全く相反するものである。天地創造に関する創世記1章31章の言葉「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」(新共同訳)について、マクフェイグは、「神は(ここで)自然はそれ自体良いと述べているのである。何かのため、あるいは誰かのために良いというのではなく、ただ良いと述べているのだ」と論じているが、環境神学においては、そのように自然は単なる客体としてではなく、それ自体独立した主体として扱われるべき存在なのである¹⁷。事実、自然を単に開発すべき「資源」としか見ない価値観が現在の環境破壊を引き起こしたことは疑い得ない。この視点が、「効用」を前面に押し出したシューマンの自然観

と大きく異なっていることは明らかである。

とは言え、シューマンのテキストを読み込むと、人間中心に見える議論の中にあっても、環境神学と重なり合う部分が随所に見られることは確かである。例えば、後世の人間の必要を考慮して神が木を植えたという神秘に感動する彼の言葉を思い出したい。ここで彼は「天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである」というイエスの言葉を引用するが、この言葉は自然環境を資源として利用する者に対して、その利用は確かに「必要なこと」であるのかという問いかけを突きつけて来るのである。もしも「必要なこと」ではないのであれば、それは神の意志に背く乱用であり、神が意図していた将来の利用者から資源を横取りすることになる。現代社会の大量消費に供するための資源の乱用が「必要」によるものではないことは、論を待たないであろう。

シューマンは、森林は神の贈物であるからこれを神に感謝すべきであることを繰り返し強調している。感謝するということは、贈り主の意図を真剣に受け止めて理解し、贈物をその意図に従って用いることが大前提である。ここに「命は贈物であり、聖なる委託である」（ラリー・L・ラスムッセン）とする環境神学の姿勢と共鳴する点が浮かび上がって来る¹⁸。年月をかけて神が世話をして来たと言われる命の贈物を受け取ることは、確かに厳粛な「委託」と言って良い。この委託をむげに扱ってはならないことは明らかである。

負しい者を抑圧することは自然界の生産性の喪失を招くとするシューマンの警告は、現代の環境正義の主張と明確に共通点がある。一見すると、森は誰もが（「jederman gemein」）利用できる共有地ではないとして、領主が森番を置く必要を強調するシューマンの姿勢は、自然資源を共同体（ゲマインデ）に開放することを要求したドイツ農民の『12箇条』（1525年）のような主張と対立し、権力者の側につくように見られるかも知れない。しかしながら、シューマンがここで表明していることは無計画な使用によって森林が荒

廃することに対する懸念であり、現代のエコロジー用語で言えば「持続可能 (sustainable)」な資源の利用を確立しなければならないという思いである。これは別段、シューマン独自の考えではない。環境破壊を避けるために森や河川の利用に規制を設けることは中世の時代から見られたことであるが、特に16世紀以降はドイツ各地で森林の減少を憂慮する声の広がり、多くの君主や都市当局が「森林条例」を定めて資源を守ろうと努めている（その際に決まって持ち出された理由付けは「農民による無責任な森の使用によって樹木が減少している」ということであるが、これに対しては無論、農民側にもそれなりの言い分があったであろう）¹⁹。

森番の重要性を訴えるシューマンの声もこのような流れの中から出て来たものであるが、その一方で、貧しい人々のために十分配慮すべきだとする彼の主張にも注目すべきであろう。リュシマコスの塩税の話に見られるように、力ある者が資源を独占しようとすれば神はその恵みを取り上げるという戒めは、発展途上国の資源を搾取している現代のグローバル経済に対する重要な警告となる。現地の人々の苦しみを無視し、目先の欲望に突き動かされた開発で生態系を破壊すれば、その結果は、将来における持続的な資源の活用が不可能となることで跳ね返って来る。このようにシューマンの主張は、現代の環境危機に対しても語りかけるメッセージを含んでいるのである。

6 結論

以上見て来たように、シューマンの自然観は、原罪の教義を前面に持ち出すことなく、森林の美しさとそこに見られる神の愛、被造物が歌う賛美を強調する喜びに満ちたものである。森の効用を語る彼の姿勢は、基本的には人間中心主義の枠組みの内に留まっている。しかしながら、神の贈物に対する感謝の重要性を強調する点において、彼の説教は、自然破壊に抗して命に対する責任を認識するよう促す現代の環境神学と重なり合うものとなっている。

る。森を守るためにその利用に規制を設けることを唱えつつも、社会的弱者への配慮を重視し、強者による資源の独占はその枯渇を招くと説くシューマンの議論も、現代の環境正義と相通ずるものがある。以上のような点を考えると、彼の『森林説教』には環境神学の先駆と呼ぶべき要素が数多く含まれていることが分かる。

シューマンは、森の中に神の祝福を見て取るためには「内なる目」が必要であるとする（C2r）。「内なる目」で現代の世界を見れば、人は単に自然環境の尊さを見出すだけでなく、正教会のバルソロメオス総主教が警告するように、「大地の実りを抑制なく食い尽くすことによって、我々は自身の貪欲と欲望によって食い尽くされてしまった」のを見出すであろう²⁰。そのような状態から逃れ出るには、シューマンが示したように自然と共に生きられることを真摯に感謝し、命を委託された責任を認識する心が必要となる。このような心の転換は、教皇フランシスコの言葉を借りれば「エコロジカルな回心」の始まりとなるであろう²¹。

400年以上前にドイツの片隅で無名の一牧師が語った説教の中にさえ、このように現代社会が抱える問題を一撃する宝が隠されていたのである。他のキリスト者たちの著作にも、環境神学の萌芽が数多く見つかるはずである。今後、このテーマにおいて一層の研究が進むことが望まれる。

◆ 本稿は、2016年度 Sixteenth Century Society Conference（2016年8月18日-20日、ブルージュで開催）において行った報告を拡大したものである。

1 教皇フランシスコ『回勅ラウダート・シーとともに暮らす家を大切に』（カトリック中央協議会、2016年）、78頁。

2 Lynn White, Jr., “The Historical Roots of Our Ecologic Crisis,” *Science* 155

(1967), 1203-1207.

- 3 ジョン・B・カブ・ジュニア『今からではもう遅すぎるか？—環境問題とキリスト教』(郷義孝訳, ヨルダン社, 1999年)。Charles L. Birch, “Creation, Technology and Human Survival,” *The Ecumenical Review* 28: 1 (1976), 66-79.
- 4 例えば, ピーカラは19世紀末から20世紀初頭のキリスト者のテキストを分析し, すでにこれらのうちに環境神学と呼び得る思想が見られることを指摘している。Panu Pihkala, “Rediscovery of Early Twentieth-Century Ecotheology,” *Open Theology* 2 (2016), 268-285.
- 5 「フランチェスコは, 森羅万象のすべてが, 同じ創造主により造られて, 一家族を構成していると考え, その構成員の一つ一つを兄弟とか, 姉妹と呼び, そのどれもが手荒に扱われても, うろたえませんでした。」石上イアゴルニッツァー美智子『良寛と聖フランチェスコ—菩薩道と十字架の道』(考古堂書店, 1998年), 131頁。リン・ホワイトですら, フランシスコの自然に対する態度を高く評価している。White, 1206-1207.
- 6 Balthasar Schumann, *ZWo [sic.] Christliche Wald Predigten/oder Tractäten von den Wälden* (Jena: Christophff Lippold, 1607)
- 7 August Beck, *Geschichte des Gothaischen Landes*, Band 3, Theil 1 (Gotha; E. F. Thienemann, 1875), 161.
- 8 新共同訳では「主の木々, 主の飢えられたレバノン杉は豊かに育ち, そこに鳥は巢をかける。こうのとりの住みかは糸杉の梢」となっているが, ルター訳聖書では「糸杉」の部分は「もみ (Tannen)」と訳されている。
- 9 この箇所理解のために助言を与えてくれた Euan Cameron に感謝したい。
- 10 シューマンは, かつて自分が語った「火災説教」をそのままこの著作に組み込んだのかも知れない。彼が1590年以前にエルンストrodaに赴任していたとすれば, 同年に発生した町の火災の後に, 確実に「火災説教」を語ったであろう。
- 11 新共同訳では「祭壇の角のところまで祭りのいけにえを綱でひいて行け」となり, シューマンがとらえた意味合いは読み取れなくなっている。
- 12 この後, シューマンの議論は, 君主は学校の維持運営を積極的に支援すべきであること, 牧師の遺族を経済的に支えるべきことなどへと流れて行くが, これらの事柄は当時のルター派聖職者にとって大きな関心事であり, シュー

バルタザール・シューマンによる『2つの森林説教』(1607年)

マンにとっては決して説教の本筋からの脱線ではないのであろう。

- 13 Kathleen Crowther-Heyck, “Wonderful Secrets of Nature: Natural Knowledge and Religious Piety in Reformation Germany,” *Isis* 94 (2003), 260.
- 14 *Ibid.*, 263.
- 15 *Ibid.*, 269.
- 16 山霊に関する伝承については以下を参照。Peter Wolfersdorf, *Die niedersächsischen Berggeistsagen* (Göttingen: Schwartz, 1968)。また、吉田孝夫によって最近、山霊の物語を含めたドイツの山々に伝わる伝説と社会の関わりが分析されている。吉田孝夫『山と妖怪—ドイツ山岳伝説考』(八坂書房, 2014年)。
- 17 David B. Lott, ed., *Sallie McFague: Collected Readings* (Minneapolis: Fortress Press, 2013), 128.
- 18 Larry L. Rasmussen, *Earth-Honoring Faith: Religious Ethics in a New Key* (Oxford: Oxford University Press, 2013), 105.
- 19 森涼子『グリム童話と森—ドイツ環境意識を育んだ「森は私たちのもの」の伝統』(築地書館, 2016年), 154–160頁。中世のケースについては以下を参照。池上俊一『森と川—歴史を潤す自然の恵み』(刀水書房, 2010年), 120–135頁。
- 20 Quoted in: Rasmussen, 247.
- 21 教皇フランシスコ, 183–188頁。